

Mon favori 2

～モン・ファヴォリ 2～

高層ビルが建ち並ぶオフィス街の一角。細い路地を入つてすぐの場所に、『喫茶あずさ』はある。挽きたての珈琲の芳しい香りが満ちている店内には、二人掛けのテーブル席が四つと、一番奥にソファ席が一つ。そして入り口から向かつて右側には、カウンター席が七つ。

里谷綾子がこの小さな喫茶店に通い始めたのは、今から二ヶ月ほど前のことだった。

この春、地元の大学を卒業した二十二歳の綾子。

田舎で生まれ育つた彼女は都会に憧れ、欧州雑貨の輸入販売を行う『株式会社 Mon favori』に就職した。

祖父母、両親、姉一人、兄二人と住んでいた実家を出て、現在は一人暮らしをしている。

都会に出てから一月ほど、綾子は毎日朝食を取らずに出勤していた。一人きりの食事は味気なかつたからだ。

しかし今では『喫茶あずさ』で、珈琲に厚切りの半トースト、ゆで卵が一個ついて四百円のモーニングを食べてから出勤するのが、綾子の日課となっていた。

さらにこの純喫茶は、綾子のお腹を満たすだけではなく、運命的な出会いをもたらしてくれた。

——カランカラン。

午後八時半を回った頃、一人の人物が扉の鐘を鳴らして『喫茶あずさ』に飛び込んできた。ダークな色合いのスーツを着こなす、ビジネスマン風の男である。

彼はカウンターの前に立つ綾子を見つけると、端整な顔を綻ばせて口を開いた。

「綾子、お待たせ。遅くなってごめんよ」

「お疲れ様です。忍ちゃん」

綾子が「忍ちゃん」と呼んだ男——猪野忍は、三十二歳。

名の知れた大会社『猪野商事株式会社』の若き専務であり、綾子の恋人でもある。

綾子は、『喫茶あずさ』で忍と出会った。

毎朝、店の奥のソファ席に陣取って、新聞を広げていた忍。綾子は彼のことが気になり、ひそかに見つめていた。そして綾子の視線に気づいた忍の方も、いつの間にか彼女を意識するようになった。

そんなある日、二人が同じビルで働いていることが判明。Mon favoriのオフィスは、猪野商事の自社ビル三階に、テナントとして入っていたのだ。その後、忍が綾子をランチに誘ったことをきっかけに、二人の距離は急速に縮まった。

やがて忍は正式に交際を申し込み、綾子もそれを承諾

二人が晴れて恋人同士となったのは、今から三週間ほど前のことだ。

大会社の重役として毎日忙しい忍だが、できる限り綾子と会う時間を工面してくれる。

火曜日の今日も、綾子は仕事終わりに忍と『喫茶あずさ』で落ち合う約束をしていたのだ。

十も年の離れた恋人は、とにかく綾子に甘い。

そんな忍はカウンターに近づいて綾子の顔をじっと見ると、表情を険しくした。

「綾子、どうした？ 泣いたのか!？」

「あの、えっと、これは……」

綾子の両目は、まるで泣いた後のように赤くなっていた。

忍はカウンター越しに手を伸ばして彼女の頬を包み、親指で目尻をそっとなぞる。

綾子は慌てて事情を説明しようとした。しかしそれよりも先に、忍が彼女の隣に立つ人物に向かつて口を開いた。

「梓！ お前、綾子に何をした!？」

「何って……僕がアヤちゃんを泣かすようなこと、するわけないでしょー」

声を荒らげた忍に向かつて呆れたようにそう返したのは、この『喫茶あずさ』の店主。

スキンヘッドにサングラス、そして口髭がトレードマークという強面ながら、実は気さくな性格の彼——猪野梓は、忍の双子の兄でもある。

「シノブちゃんがなかなか来ないからさあ。アヤちゃんと二人、夕飯でも作って待ってようってことになったんだよ。それで、玉ねぎのみじん切りをお願いしてみたんだけど……」

そう言つて梓が苦笑すると、綾子は恥ずかしくなつて俯うつむいた。

先ほど彼女は、玉ねぎを刻きんでいて涙が止まらなくなつてしまつたのだ。

「玉ねぎと一緒にアヤちゃんの指も刻まれちゃうんじゃないかって、おじさんハラハラしちゃつたよ」

梓は、さらにそう続けた。綾子の包丁を握る手は、とても危なっかしかつたのだ。

末っ子の綾子とはかく家族に甘やかされて育つたため、料理スキルは限りなくゼロに近い。

最近では本人も、さすがにこのままではまずいのではないかと、思い始めていた。

「というわけで、シノブちゃん。アヤちゃんが泣きながらスリル満点に刻んだ玉ねぎと、アヤちゃんが四苦八苦しながら割つてかきまぜた卵で作りました。どうぞ、召し上がれ」

梓はそう言つて、忍の前に巨大なオムライスが載つた皿をドンと置いた。

忍の運転する車が綾子の住むマンションに到着したのは、午後十時を過ぎた頃だつた。

「——あれ？」

最初に異変に気づいたのは、綾子を見送るために運転席から降りた忍だつた。

「忍ちゃん、どうかしましたか？」

「綾子の部屋に灯りがついている」

「えっ!？」

昨夜も、綾子は忍に車でマンションまで送つてもらつた。しかしマンションに到着すると、忍は

綾子を自分のマンションに連れて帰りたいと言つた。

昨日、忍は一週間のフランス出張から帰つてきたばかり。綾子自身も、久しぶりに会えた忍ともつと一緒にいたいと思つた。

だから綾子は、一度は自分の部屋に入ったものの、必要な荷物だけ持つて再び彼の車へと戻つた。そして、彼と二人の夜を過ごしたのだ。

部屋を出る際、確かに綾子は慌てていたが、消灯と戸締まりだけはちゃんと確認したはずである。

「電灯が故障したんでしようか？」

「故障したら、つかなくなるのが普通だ。——部屋の中まで一緒に行くよ、綾子」

「え？」

「心配だから、綾子を一人であの部屋には帰せない」

忍はそう言つて車をロックし、綾子の荷物を持つてエントランスへと向かう。

彼がこのマンションに足を踏み入れるのは、これが初めてだつた。

築五年、十階建てのワンルームマンション。綾子の部屋は、五階にある。

共用部分はいつも清潔に保たれており、エントランスや各階のエレベーターホールは夜でも明るい。そして、住人のほとんどは若い女性である。

綾子の就職と一人暮らしが決まつた時、このマンションを契約してきたのは、彼女の姉と上の兄だつた。

家族の中でも特に過保護な二人は、自分達が納得できるほどセキュリティがしっかりしている部

屋でない、気が済まなかったらしい。綾子の下の兄は、そんな彼らを見てさすがに呆れていた。部屋に向かう途中、綾子はこのマンションに住まうことになった経緯を忍に説明した。忍は綾子の下の兄とは違い、呆れることなく頷いた。

「確かに、いいマンションだ。防犯カメラが各所に設置されているし、エントランスもオートロックだったしね」

とはいえ、綾子の部屋にはなぜか灯りがついていて、不安そうな綾子を宥めるように、忍はきゅつと彼女の手を握った。

綾子の部屋に辿り着くと、まずは忍がドアノブに手をかける。

「うん。鍵は、かかっているね」

ゆっくりノブを回して施錠されていることを確かめると、忍は綾子から部屋の鍵を受け取った。そして彼女を自分の背に隠し、鍵穴にそれを挿入する。

——カチャリ。

解錠の音は、静かなホールにやけに大きく響いた。

しかし、部屋の中で誰かが慌てるような気配はしない。忍がそつと扉を開けると、綾子もおそるおそる中を覗き込む。次の瞬間、綾子は「あつ」と声を上げた。

「……靴」

「綾子の……ではないよね」

こぢんまりとした玄関に揃えて置かれていたのは、明らかに綾子のものではない大きな靴。

しかし、それに見覚えがあった綾子は、慌てて靴を脱いで部屋の中に駆け込んだ。

玄関から続く短い廊下にはバスルームとトイレの扉。廊下の先の扉を開ければ、フロアリングの六畳間がある。

間取りを興味深そうに眺めている忍を置いて、綾子はただだつと廊下を走り抜けた。その勢いのまま扉を押し開くと——

「おう、アヤ。おかえりー」

「お、おおっ——お兄ちゃん!?」

丸いローテーブルの上に缶ビールとつまみを並べ、テレビの前に陣取る次兄——里谷虎太郎の姿があった。

「コタロー兄ちゃん！ 何してるのっ!?!」

「何って、見たらわかるだろ？ 今日の試合の奮闘を称えて、祝杯をあげてんだよ」

「そうじゃなくって……!!」

虎太郎は、虎をシンボルとするプロ野球球団を鼻屑にしている。本日行われた試合の結果は、四対三でその球団のサヨナラ勝ち。テレビには、スポーツニュースのキャスターと、色とりどりのジェット風船が飛び交う球場が映し出されている。

機嫌よく缶ビールをおおる次兄に向かい、綾子は叫んだ。

「どうして、何の連絡もなしにいきなり来るのよっ!」

「おにーさまのサプライズな訪問に、お前は泣いて喜ぶと思ったんだがなあ」

「びっくりしたよ！ 泥棒かと思っただじゃない！」

「泥棒が堂々と電気つけて野球観戦するかよ。しかし、お前……まったく自炊してねえだろ？ 冷蔵庫、ろくなもの入ってなかったぞ」

「うっ、うるさいな、勝手に冷蔵庫開けないでっ！ そもそもどうやって入ったのよっ！」

虎太郎は手にしていた缶ビールを飲み干すと、いまだ状況が掴めていない綾子に向かって笑った。「どうやってって、お前。合鍵使ったに決まってるじゃねえか」

「あ、合鍵!？」

「言っとくけどな、うちの家族は全員一本ずつ、この部屋の鍵持ってるんだぞ」

「え、えええっ……!？」

「お前がこの部屋に引越す時、皆それぞれ金出したんだからな。当然の権利だろ？」

虎太郎の言う通り、ほとんど貯金のなかった綾子に代わって、敷金に礼金、不動産屋への仲介手数料など初期費用を支払ってくれたのは、姉と二人の兄達だった。

さらに、冷蔵庫や洗濯機などの家電製品を買い揃えてくれたのは両親、布団や家具などを一式用意してくれたのは祖父母である。

末っ子の綾子の一人暮らしは、家族全員のバックアップのおかげで実現した。

その見返りとして、出資者達は皆自由に綾子の部屋に立ち入る権利を持っているのだ。

それを知らされていなかった綾子は、ただ啞然とするばかり。

そんな妹の目の前で、虎太郎は虎のしっぽのストラップがついた鍵を指に引っかけチャラチャラ

と回した。そして、視線だけを彼女の背後へと向ける。

そこに竹む忍の全身を、虎太郎は鋭く見据えた。しかし、すぐにおどけた口調で言う。

「それよか、アヤよ。後ろの兄さんを俺に紹介しやがれってんだ」

「え？ あ、えっと……」

「あ、やっぱりいい。お前の説明聞くより、本人と話した方が手っ取り早いわ」

「コタロー兄ちゃん!？」

虎太郎はそのりと立ち上がると、綾子を押しのけて忍に歩み寄った。

「どうも、はじめまして。綾子の兄の里谷虎太郎と言います」

「猪野忍です。はじめまして」

虎太郎は、綾子より八つ年上の三十才。長めの髪を金色に染め、耳にはピアスをいくつも付けている。一見軟派な風貌ではあるが、里谷家が営む自動車整備工場の現場責任者として毎日汗を流す働き者だ。

機械オイルが染み込んだいつもの作業服から、襟付きのシャツとジーンズに着替えた今日の彼は、妹の綾子の目から見ても、ちよっとかっこいい。

「妹が、いつもお世話になって……ますか？」

「いえ、お世話になっっているのは僕の方です」

急に綾子の次兄と対面することになったというのに、忍は平然としている。

そんな彼に向かって、虎太郎はいきなり本題に入った。

「それで単刀直入にお聞きしますけど、妹とはどういった関係で？」

「真剣にお付き合いさせていたんでいます」

すかさず答えた忍の言葉を次兄の後ろで聞き、綾子はぼつと頬を赤らめる。

そんな彼女を振り返り、虎太郎はすつと両目を細めて尋ねた。

「……アヤ、マジか？ この……猪野さんと、付き合い合ってるのか？」

「えっと、あの……うん」

「お前、男と付き合うってことがどういうことか、本当に分かっているのか？ お手てつないでお花畑でピクニック、てことじゃねえんだぞ!？」

「わ、分かっているよっ!」

綾子は虎太郎に言い返しつ、彼の後ろに立つ忍を見た。忍は、綾子に優しい眼差しを向けている。思いがけず次兄と忍が対面することになってしまつて、綾子は慌てるばかりだった。しかし、堂々と交際宣言をしてくれた忍に、自分もちゃんと応えなければいけない。

「私も、真剣に、お、お付き合いさせてもらつてます……」

綾子が頬を染めながらそう告げると、忍の顔が嬉しそうに綻んだ。

一方の虎太郎は、金色の頭をがしがしと掻いた。

「うっわ……ついに、この日が来たか……」

とにかく立ち話もなんなので、と綾子は忍に腰を下ろすよう勧める。虎太郎もテレビを消すと、ローテーブルを挟んで忍の向かい側に座つた。

「ビール……冷えてるけど飲みますか？」

「いえ、車なので遠慮しておきます」

新たなビールの缶を手を取つた虎太郎だったが、忍が断るとそれをテーブルに戻した。

「アヤ、お茶！ 冷蔵庫に入ってるから持つてこい！」

「え？ あ、はいっ……」

虎太郎に命令されて、綾子は慌ててキッチンへと飛んでいく。

冷蔵庫を開けると、買った覚えのない一リットルのお茶のペットボトルが冷やされていた。

その他にも、タッパーがいくつか並んでいる。中身は、おそらく姉お手製のお惣菜だろう。

いつもの綾子なら、しばらく食卓が華やくと喜ぶところだ。しかし、今はそんな余裕はない。

綾子はグラスを三つ出してお茶を注ぎ、急いで次兄と恋人が対峙するテーブルに戻つた。そして

深く考えぬまま、忍の隣にすくと腰を下ろす。

「……おい、アヤ」

とたんに、虎太郎が複雑そうな顔をして唸る。

「え？ 何？」

「俺……これじゃあまるで、娘の恋人が挨拶に来た時のお父ちゃんみたいじゃねーか……」

虎太郎は口を尖らせてそう言うのと、胸の前で両腕を組んだ。

そして、これまで綾子が見たこともないような、大真面目な顔をして話し始めた。

「もう分かっているかもしれないが……今回、俺をここに送り込んだのは、姉ちゃんだ」

次兄の言葉を聞き、綾子は首を傾げる。

「お姉ちゃんのお惣菜を届けにきてくれたんでしょ？一言連絡してくれたら、こんなにびつくりしなかったのに……」

「ばーかっ！わざわざデリバリーだけ、しにきたわけじゃねえっつーの！」

のん気な綾子の答えに頭を抱えつつ、虎太郎は続ける。

「姉ちゃんさ、少し前からアヤの様子がおかしいって悩んでたんだぞ。お前、二週連続で週末に帰ってこなかったしな」

「あ……」

就職して以来、綾子は週末ごとに実家に帰省していたが、忍と交際を始めてからそれが途絶えた。姉がその理由を根掘り葉掘り尋ねてくることはなかったが、気にしていなかったわけではないようだ。

「やっと帰ってきたと思ったら、今度は何やら悩み事を抱えているようだったし」

三日前の土曜日、綾子は三週間ぶりに実家に帰省した。しかし、その時フランスに出張していた忍との間にすれ違いがあり、悶々と悩んでいる最中だったのだ。

「そんなお前を心配して、昨夜は早めに電話してみた……声は明るくなってたけど、やっぱり様子が変だったって」

過保護な姉は、都会で一人暮らしを始めた綾子を心配し、每晚十一時に必ず電話を掛けてくる。昨夜、綾子はその電話を受けたのは、忍に送ってもらい、一度この部屋に帰ってきた直後だった。

帰省中、どこか元気がないようだったと心配する姉に、忍とのすれ違いが解消された綾子は、もう大丈夫だと答えた。そして姉との会話の中で、忍への想いも再確認した。そのとたん、綾子はマンションの前で待つ忍のもとに一刻も早く戻りたくなって、ほとんど一方的に電話を切ったのだ。

「電話の後、姉ちゃんが『アヤの周りに男の気配がある』とか何とか言い出してな」

虎太郎はそう言うと、綾子の隣に座った忍にちらりと視線を送る。

そして、いやに重々しいため息をついてから、また口を開いた。

「俺は、別にアヤに彼氏ができたっていいと思っただけ？せっかくの一人暮らしなんだから、おおいに羽を伸ばして人生経験を積んでいくべきだ」

虎太郎の肯定的な言葉に、綾子はほっとする。しかし、彼はすぐに「だがな」と続けた。

「頼むから、できちゃった結婚だけは勘弁してくれよ！そんなことならうもんなら、姉ちゃんが怪獣化するっ！」

「そ、そんな……コタロー兄ちゃん、大げさだよ」

「お前は、里の蔦子様の本当の恐ろしさを知らねえから、そんなことが言えるんだ！」

「何、里の蔦子様、って？お姉ちゃんはすごく優しくて穏やかなのに」

「ばっかもんっ！姉ちゃんが優しいのはアヤ限定だ！穏やかな顔するようになったのだって、お前が生まれてからだっつーのっ！」

虎太郎はこめかみに青筋を立てて叫び、右手の拳でドンツとテーブルを叩いた。

さらに、その衝撃で倒れそうになったグラスを左手で器用に拾い上げ、中のお茶を一気に飲み干す。そして彼は、神妙な表情を浮かべて綾子と忍に向き直った。

「これから話すことは、姉ちゃんが今までひた隠しにしてきたことだ。アヤに喋ったとバレたら、俺の命はないかもしれない。遺言だと思ってよく聞け」

彼は重々しく前置きをすると、ゆっくりと話し始めた。

“里の蔦子様 の武勇伝を——

里谷家の長子である蔦子。彼女はかつて、超がつくほどの不良少女だった。

女のみならず男の不良連中までも傘下におさめ、“女帝”として名を馳せていたのだという。

「しかもそれ、姉ちゃんが中学ん時の話だけ？ 俺なんか、まだ小学校も低学年。晩飯だから呼んでこいっておふくろに言われて、探しにいったらさ……近所の河原で隣の奴らと決闘してる姉貴を見つけてしまった、いたいけな少年の気持ち分かるか!？」

「け、決闘!？」

「学ラン着たゴツい男どもを、姉貴が次々と川へ放り込んでくんだぞ!？」

「……」

そんな蔦子が最も荒れていたのは、十五歳——中学三年生になった頃だった。

父親が出張と偽って女性と旅行に行っていたことが判明し、母親が家出をしたのだ。

当時、一家が営む自動車整備工場の業績も悪化し始め、里谷家は最大の危機を迎えていた。

ところが、事態は突如好転する。

お腹に赤子がいることが分かり、家出をしていた母親が戻ってきたのだ。

「その赤子つてのがお前だ、アヤ。お前が生まれてなかったら、たぶんあの時うちの家族はバラバラになっちまった」

父親は不貞を働いたことを心より詫び、新しい命のために事業を立て直そうと奮起。

そして生まれたばかりの綾子を見た瞬間——蔦子の顔が一変した。まさに、修羅から仏へ。

赤子の無垢な姿は、蔦子の中にも確かに宿っていた母性を目覚めさせたのかもしれない。

産後の肥立ちが悪く、母がしばらく入院しなければならなくなったことで、蔦子は赤子の母親役を買って出た。

「それからすぐに、姉ちゃんは悪い仲間と完全に手を切った。人が変わったように勉強に励んで、おやじの仕事を手伝いつつ、アヤの面倒も見んだ」

「そうなんだ……」

何も知らなかった綾子は、呆然とした。

父が浮気をしていたなんて、過ぎたこととはいえ、かなりショックだ。それに、優しい姉に荒れていた時代があったとは……

一方、一緒に話を聞いていた忍は「なるほど」と頷いた。

「お姉さんが綾子を大切に思うのも、当然ですね」

「そう。姉ちゃんにとって、アヤの誕生は人生の転機だからな。うちの家族全員にとっても」

今から二十二年前。綾子の誕生をきっかけに結束を固めた里谷家は、一丸となつて危機を乗り越え、事業もなんとか持ち直した。

現在は、父が顧問、薦子が社長、長男が営業部長、そして次男の虎太郎が現場責任者となり、里谷自動車整備工場の経営状態は安定している。

そんな里谷家の面々が願うのは、綾子の健やかな成長と幸せである。何より、実家から飛び出して一人暮らしを始めてしまった彼女が、心配でならないのだ。

「面倒くさい一家ですみませんね」

虎太郎は苦笑しつつ、忍をまつすぐ見つめて尋ねた。

「これ聞いても、まだアヤと付き合つていこうと思ひます？」

「もちろん。最初にお伝えした通り、彼女とは真剣にお付き合いさせていたと思います。いずれ、ご家族にもご挨拶にうかがおうと思つていたところです」

「うーん……でも、うちの姉ちゃん、怪獣つすよ？」

虎太郎がおどけたように告げると、忍もくすりと笑い、少しだけ砕けた口調になつた。

「だが、綾子のお姉さんだ。それに……あなたは味方になつてくれそうに見える。違うかな？」

「ん？」

「あなたは、綾子が僕の車で帰つてきたことに気づいていた。その上で、僕を試したのでは？」

忍の問いかけに、虎太郎は口の端を持ち上げてにやりと笑う。

そして腕を伸ばし、テーブルの向かい側にいる綾子の髪をぐしゃぐしゃと撫でた。

「一人暮らしの女の部屋に灯りがついてて、それに気づかないような男。あるいは、気づいていながらアヤを一人で部屋に帰すような野郎なら——二度とアヤに近づけないつもりだったよ」

「コ、コタロー兄ちゃん」

物騒な目付きでそう言った虎太郎に、綾子は乱れた髪を直すのも忘れて慌てた。

忍はそんな綾子の頭を優しく撫でて、髪を直してやる。

虎太郎は二人の姿を見て、大きなため息をついた。

「猪野さん、女には困つてなきそうなのになあ。アヤみたいなガキのどこがいいんですか？」

「コタロー兄ちゃん、ひどい！」

綾子が膨れつ面で抗議すると、そういう顔をするからガキなんだ、と虎太郎が鼻で笑つた。

忍は兄妹のやり取りを眺めながら苦笑し、もう一度綾子の髪を撫でる。

「彼女のこんなところも、たまらなく可愛いんだ」

「うわっ、ナチュラルに惚気てきたっ！」

狭い部屋に、虎太郎のツツコミが響いた。

グラスのお茶を飲み干すと、忍は早々に腰を上げた。

そして思い出したように、上着の内ポケットから名刺を出して虎太郎に渡す。

「今夜は思いがけず良い出会いをしたよ」

「こつちこそ。いきなりで悪かつたけど、会えてよかつた」

いつの間にか、忍と虎太郎の会話から堅苦しさが消えていた。

二人の和やかな様子にほっとした綾子は、忍とともに玄関までやってきた。

本当は一階のエントランスまで見送りがかったのだが、こんな時間に部屋の外に出てはだめだ、と忍に叱られて断念したのだ。

「忍ちゃん、あの……いきなり兄に会わせてしまつて、ごめんさい」

「いいや、綾子のご家族とは会つて話したいと思つていたから、むしろいい機会だつたよ」

「うちの家族と？」

「綾子と真剣に付き合つていることを、ご家族にも知つてもらいたい。綾子を大事にするつて伝えて、安心してもらいたいと思つてたんだ」

そんな忍の言葉が嬉しくて、綾子は瞳を輝かせて彼を見上げる。

すると、そつと彼の顔が近づいてきた。

綾子はリビングにいる次兄の気配を気にしつつも、両目を閉じてそれを受け入れる。

ちゅっ、と唇が触れるだけの優しいキス。

「おやすみ、綾子」

「おやすみなさい。気をつけて帰つてくださいね」

そう言葉を交わし、綾子は忍がエレベーターに乗り込むのを見届けてから玄関の扉を閉めた。

すると、リビングの方から携帯電話の着音音らしき音楽が聞こえてきた。おそらく虎太郎の携帯電話だろう。

すぐにその音楽は途切れ、「はいはい、姉ちゃん。おつかれさん」と虎太郎の声が響いた。

時刻は午後十一時。姉の蔦子がいつも電話を掛けてくる時間だ。綾子がリビングに戻ると、ローテーブルに片肘をついた虎太郎が、面倒くさそうに電話で話をしていた。

「心配するようなことは、何にもないと思うけどな。——とにかく、綾子と代わるわ」

虎太郎は「姉ちゃんから」と言つて、携帯電話を綾子に差し出した。

「も、もしもし、お姉ちゃん？ お惣菜そうざいいっぱいありがとう。いつも、ごめんね」

綾子がそう言うと、電話の向こうから姉の声が聞こえてきた。

「いいのよ、綾子。ご飯はしっかり食べなさいね。それより、あの……今夜のことだけど……」

蔦子が珍しく口ごもる。いきなり虎太郎を送り込んだことを、もしかしたら後悔しているのかも
しれない。

何となくそう感じた綾子は、自分の方から話を切り出した。

「お姉ちゃん、いろいろ心配させてしまつたみたいでごめんね」

「綾子……」

「あの、あのね。私……今、お付き合ひしている人がいるの。コタロー兄ちゃんには、さつきその人と会つてもらつたんだ」

「そう……」

それから綾子は、少しだけ忍について話をした。

蔦子は静かにそれを聞いていたが、最後に小さくため息をついて口を開いた。

「綾子にいい出会いが訪れたこと、私も嬉しいわ。だから、これからも何かいいことがあった時は、できれば教えてほしい」

「うん……」

「それに、もし悩み事や心配事がある時は頼ってほしい。あなたが苦しんでいるのに何もできないのは、とても辛いから」

「うん、分かった……」

綾子の返事に、薫子は安堵したように息を吐き、「おやすみ」と言って電話を切った。

綾子が顔を上げると、虎太郎は窓から外を見下ろしていた。

「コタロー兄ちゃん、携帯」

「おう。姉ちゃんに猪野さんのこと、ちゃんと話したのか？」

「うん、少しだけ。詳しいことは、コタロー兄ちゃんが帰ったら聞くって」

「げ！ 姉ちゃんの尋問が待ってると思うと、帰りたくねーな……」

そうぼやく虎太郎の脇から、綾子も窓の外を覗く。ちょうど、忍の車が発進したところだった。

「猪野さんの車……アレ、すげーいい車だよな」

「うん、すごいよね。走ってる時、中がすごく静かで、シートもふわふわしてるの」

忍の車は、すぐに見えなくなってしまった。

それを残念に思いながら窓から離れようとする綾子に向かい、虎太郎は両腕を組んで話を続ける。

「ああいう高級外車はな、普通、正規のディーラーを通して整備や修理に出される。だから、うち

みたいな個人経営の整備工場にはあんまり回ってこねえんだ」

「ふうん」

「けど、ちよつと前……珍しくああいうのが整備で回ってきたことがあってな。その時、姉ちゃんが言ってたんだ」

虎太郎はそこで言葉を切り、綾子の顔をじっと見下ろした。そして目をスツと細めて続ける。

「綾子をやるとしたら、『こんな車にあの子をお姫様のように乗せられる男だけ』ってさ」

「え？」

目をばちくりさせる綾子を見て、虎太郎は今度のため息をついた。

「マジで、そんな男が現れちゃうなんてなあ。世の中、何が起こるか分かんねーな！」

「コタロー兄ちゃん？」

きよとんとした綾子の髪を、虎太郎はぐしゃぐしゃと撫でた。

2

翌日、水曜日の朝。

「——いやあっ！ アヤちゃんっ……!!」

綾子が『喫茶あずさ』の扉をくぐったとたん、梓が大きな悲鳴を上げた。

彼はわなわなと震えながら、綾子と一緒に店に入ってきた人物を指差す。

「だ、だ、誰なの、その男っ……!？」

金色に染められた髪、ピアスがいくつもぶら下がった耳たぶ、襟元が開いたシャツと緩めのジーンズ。オフィス街の純喫茶では、あまり見かけない風貌の客だ。

バイカラーワンピースにシックなパンプスという、落ち着いた格好の綾子の隣には似合わない。

「シノブちゃん！ 誰なの、あの男っ!？」

梓はカウンタ―から身を乗り出すようにして、目の前に座る忍に向かって叫んだ。

「落ち着け、梓」

忍は呆れたような声でそう言うと、椅子から立ち上がった。

「おはよう、綾子。——お兄さんも、おはようございます」

「——え？ お、お兄さん……?」

サングラスの奥で目を丸くした梓をよそに、忍は綾子とその次兄の虎太郎に、にこやかな笑みを向ける。綾子も、おずおずと梓に虎太郎を紹介した。

「おはようございます、マスター。突然連れてきてすみません。これ、うちの下の兄です」

「ア、アヤちゃんのお兄さんなの？ ホ、ホントに?」

なおも首を傾げる梓に、今度は虎太郎が愛想のいい顔をして近づいた。

「どーもどーも。雰囲気のあるいい店ですねえ。いつも妹がお世話になってます」

昨夜、虎太郎は綾子のマンションに一泊した。

そして今朝は、綾子にくつついて『喫茶あずさ』までモーニングを食べにやってきたのだ。

虎太郎が綾子の兄だと知って安堵した梓は、慌てて彼に握手を求めた。

「うわー、アヤちゃんのお兄さん、はじめまして！ うちも、弟がお世話になっております！」

「あ、弟って、猪野さん？ アヤに聞きましたけど、双子の兄弟なんですよね。しかし、あまり似てないですね」

「忍ちゃんとマスターは、二卵性の双子なんだって」

すかさず綾子が答えると、虎太郎はカウンタ―席に腰を下ろしつつ「なるほど」と頷いた。そしてすぐに、眉を寄せる。

「……つつーか、アヤよ。その『しのぶちゃん』って呼び方、どうにかならねえの」

「え?」

「こう、違和感がハンパないというか……」

虎太郎はそう呟きながら、綾子を挟んで反対側の席に座った忍に目を向ける。

すると梓がカウンタ―の中から「わかるっ!」と同意して噴き出した。

そもそも『しのぶちゃん』と最初に呼んだのは、忍と一緒にこの世に生まれ落ちた梓である。これまで忍をそのような愛称で呼ぶ者は、他にいなかった。

いや、呼ぶことを許されるような者がいなかったというのが正しいだろう。

綾子にそれを許した張本人は、苦笑を浮かべて彼女の肩を抱く。

「いいんですよ、慣れましたし。むしろ、俺にとつて綾子がいかに特別なか……手っ取り早く周

困に察してもらるので都合がいい」

「はあ。まあ、やっかみがこいつに集中しないように、気をつけてやってくださいよ」

虎太郎は少しだけ真剣な目をして、そう告げた。なんだかんだで、彼も世間知らずな妹のことが心配なのだ。

忍は綾子の髪を撫でながら、「重々気をつけます」と答える。

すると虎太郎は、今度は呆れたような顔をしてため息をついた。

「それと、そうやってナチュラルに綾子に触れるの、ちょっと控えませんか？ 俺の前ならいいですけど、うちの姉ちゃんの前で無闇にやると、ぶっ飛ばされますよ？」

「へえ？」

忍は楽しそうに首を傾げ、不敵な笑みを浮かべて綾子のつむじにキスを落とした。

一方、虎太郎の言葉に過剰に反応したのは、カップに珈琲を注いでいた梓だ。

「シノブちゃんをぶっ飛ばしちゃうの？ そんなお姉さんに、ぜひお会いしたいっ！」

「うーん……命が惜しいなら、やめときましょ」

興奮した様子の梓に、虎太郎は生温く微笑みながら忠告した。

『喫茶あずさ』で朝食を済ませると、綾子は忍と虎太郎とともに店を出た。

虎太郎は Mon favori のオフィスに顔を出し、社長達に挨拶をしてから帰るといふ。綾子は、保護者同伴で出勤なんて子供みたいで恥ずかしい、と嫌がったが、虎太郎には鼻で笑われてしまった。

「どこからどう見ても、まだガキじゃねえか。なあ？ 猪野さん」

「いやいや。綾子は社会人として充分、頑張っているよ」

昨夜、忍から名刺を受け取った虎太郎は、彼が猪野商事の専務であることを知った。綾子は自分の勤め先が猪野商事の自社ビルに入っていること、忍の祖父が Mon favori の社長で母親が部長、父親が猪野商事の社長を務めていることを話した。

ちなみに綾子は、猪野商事のアパレル部門でチーフバイヤーを務める忍の妹とも、ランチを一緒に取った。つまり綾子は、忍の家族全員と面識があるのだ。

「世間って、狭いよな」

虎太郎がそんな感想を口にしたくなるのも、無理からぬことだろう。

彼は猪野ビルに入る直前、忍に向かって尋ねた。

「それで——うちには、いつ来ます？」

「コ、コタロー兄ちゃん？」

兄のいきなりの言葉に、綾子は驚いた。

慌てて虎太郎を見上げたが、彼の視線は忍をまっすぐ捉えている。綾子になど見向きもしない。

こういう時に無闇に口を挟んでも、「黙れ」とドスのきいた声で一喝されるのがオチだ。

綾子は口をつぐみ、今度はおそろのおそろ忍を見上げる。

すると、忍は歩きながら綾子の頭をぼんぼんと撫でてくれた。

「差し支えなければ、今週末にでも挨拶にうかがいたいと思っていますよ」

「了解。それを聞いたら姉ちゃんは何としても都合つけると思うし、とにかく早いに越したことはない」

忍と虎太郎の間で進められる話に、綾子が口を挟む余地はない。

綾子は背の高い二人の顔を交互に眺め、彼らと一緒にエレベーターに乗り込んだ。

「お姉さんに、よろしく伝えてほしい。明日の夜、改めて俺から連絡させてもらうよ。お姉さんには、その時に直接、週末の都合をうかがうつもりだ」

「ああ、それがいい。姉ちゃんも、筋を通そうとする相手には寛容だからな」

虎太郎と会話をする忍の一人称は、いつの間にか「僕」から「俺」に変わっていた。互いの口調も、ずいぶんと砕けてきている。

そうこうしているうちに、三人が乗り込んだエレベーターは三階に到着した。

Mon favori のオフィスは三階にある。綾子とともにエレベーターから降りた虎太郎は、忍にくるりと身体ごと向き直った。

「――猪野さん」

そして、深々と頭を下げる。

「綾子を、よろしくお願いします」

急にかしこまってそう告げた虎太郎に、忍は一瞬驚いたような顔をした。

しかし閉まる扉の隙間から、「はい」としっかりと頷く彼の姿が見えた。

その日の夜。

綾子は三人の先輩社員達によって、猪野ビルからほど近い居酒屋に連行された。

今朝、突然オフィスの現れた綾子の次兄・虎太郎に、彼らも随分と驚いたのだ。

そして先輩三人がもつとも気になったのは、虎太郎が忍と会ったのか、その場合どんな反応をしたのかだった。

綾子が忍と付き合っていることは、彼らも知っている。

その忍はというと、今夜は遅くまで仕事の予定が詰まっているらしい。

彼の有能な秘書である山本麻衣子は、まだフランスに滞在中で、明日の午後に帰国する予定だ。

忍が仕事を進める上で、山本の不在は随分な痛手のようなだった。

まだ専務室で奮闘しているであろう忍を想いつつ、綾子はノンアルコールカクテルをちびりと飲んだ。そして、テーブルの皿からだし巻き卵を箸で取り、口に放り込む。忍が作ってくれるだし巻き卵の方が、ずっとふわふわしていておいしい。それが綾子の率直な感想だった。

綾子は違う皿に箸を伸ばしつつ、興味津々で身乗り出す先輩達に、昨夜から今朝にかけての出来事を話した。さらに、この週末には忍が実家に顔を出す予定だと告げる。

すると先輩達は一瞬顔を見合わせ、次いで尋ねた。

「アヤは、結婚するのか？」

「……え？」

彼らの問いかけに、綾子はきよんとする。

三人は「何だ、その反応は」と、揃って眉を顰めた。

「ただ付き合ってるってだけで、相手の実家にまで挨拶になんか行くかよ。ふつう」

そう呟いた犬飼孝弘は、今まで恋人の親兄弟に会ったことなどないらしい。元コックの肩書きを持つ犬飼は、自称・恋愛の達人。恋愛下素人の綾子とは互いを対極の存在と認識しつつ、遠慮なく話ができる間柄である。

「そーよお。しかも、わざわざ他県まで……」

山路咲和子も頷いて、犬飼の言葉に同意する。かつて売れっ子ホステスだった咲和子は、危なっかしい綾子をいつも姉のように見守っている。

そして、この中で唯一の既婚者である鳥居瑛太は、大真面目な顔で言った。

「挨拶をするということは、つまり結婚を前提として付き合ってるってことだろう？」

鳥居の前職は、ホテルのドア・ボーイ。彼には年上の妻と、十歳になる娘がいる。子供っぽい綾子を娘のように扱い、説教することも多い。

「け、結婚を、前提……!?!」

鳥居の言葉を聞いて、綾子は目を丸くする。

先輩達は、やれやれとため息をついた。

「実家と一緒に行く前に、お互いそういうことは確認しといた方がいいと思うぞ」

犬飼はエイヒレを齧りつつそう言って、ビールをあおった。

「そうそう。お姉さん達に彼のこと認めてもらいたいと思うなら、計画的に進めなきゃ」

軟骨の唐揚げをコリコリ咀嚼しながら、咲和子も頷く。

「まあ、俺が綾子の保護者なら、とりあえず一回はちゃぶ台をひっくり返すがな」

鳥居はただひたすらビールを飲みながら、据わった目をして呟いた。

そんな鳥居に、咲和子が呆れたような顔をする。

「やーだ、瑛太君。今時、頑固オヤジなんて流行らないわよ」

すると鳥居は、空になったビールジョッキをテーブルに叩き付けて「うるさいっ！」と吠えた。

「娘を嫁にやるのに、流行りすたりなんぞ気にしてられるかっ！」

酔った鳥居は、二十二歳の綾子に自分の一人娘を重ねているらしい。「そう簡単に嫁にやってたまるか！」とキレた。

咲和子と犬飼は顔を見合わせ、「やれやれ」と言うように肩を竦めた。

先輩達と夕食を済ませた綾子がマンションに辿り着いたのは、午後十一時のことだった。

部屋に入って鍵をかけると同時に、携帯電話が鳴り出す。

慌ててバッグから携帯を取り出すと、姉の薫子からだった。

帰宅した虎太郎から忍について詳しく聞き出したのか、薫子が改めて彼について尋ねてくることはなかった。

明日には忍を電話で紹介するつもりだと綾子が伝えると、姉は楽しみにしていると答えた。そうして薦子との電話を終えると、すぐにまた携帯電話の着信音が鳴り響く。待ち受け画面に表示されているのは、忍の名前である。

「忍ちゃん、お疲れ様です」

「お疲れ、綾子。もう家に帰ってる？」

「はい」

「ちゃんと鍵はかけたか？」

「かけましたよー」

その後、二人は明日の夜について話した。忍は朝に言っていた通り、綾子の実家に電話を掛けるという。秘書の山本も帰国の予定だし、何とか早く上がれるように仕事を調整してくれるそうだ。

「泊まりの用意をして、うちにおいで。それから、明日は一緒に晩飯も食べよう。綾子の食べたいものを作るから、何がいいか考えておきな」

「あつ、はい」

忍の作ってくれるご飯は、とにかくおいしい。それゆえ、綾子の声は自然と弾んだ。

真つ先に彼女の頭に浮かんだのは、熱々ふわふわのだし巻き卵。

食べたいたいものと言われ、先ほどの居酒屋で口にした、ちよつと残念なだし巻き卵を思い出したのだ。それとともに、先輩達に尋ねられた言葉も浮かぶ。

結婚前提のお付き合い——それについて、忍はどう考えているのだろうか。

「……忍ちゃん、今日はまだお仕事ですか？」

「いや、やつと片がついて、今から帰るつもり。どうした？」

「あの……」

「うん？」

綾子は忍の考えを聞こうと口を開きかけたが、そこではつとした。

自分の方こそ、彼との将来について、まだ何も考えたことがないと気づいたのだ。

綾子は忍のことがとても好きだし、この先もずっと一緒にいたいと思っている。

だが異性との交際自体が初めてなので、恋人から先の関係を想像するのは難しい。

身体を重ねたとはいえ、綾子の想いはまだどこか幼く、結婚と聞いてもピンと来ないのだ。

「綾子、どうした？」

綾子が黙りこくっていると、忍は不思議そうに呼びかけてくる。

しかし自分の心も定まらない状態で、彼になんと尋ねればいいのか、綾子には分からなかった。電話越しではなく、お互いの顔を見て直接話せば、答えが見つかるかもしれない。

そう思った綾子は、今夜は忍にその話題を振るのをやめた。

「いえ……あの、お疲れ様です。気をつけて帰ってくださいね」

「ああ、ありがとう。おやすみ、綾子」

耳に当たった携帯電話から響く、忍の声。それは、綾子の鼓膜を優しく揺らした。

翌日の木曜日。

Mon favoriに出勤した綾子は、朝一番の珈琲コーヒーをふるまって、社長と営業三名を送り出した。

そして彼らのカップを洗って給湯室から戻ってくると、声を掛けられた。

「アヤー、ちよっといい？」

「はい」

綾子を呼んだのは、部長の田村奈江たむらなえ。正しくは猪野奈江だが、職場では旧姓を名乗っている。そう、彼女こそ忍の母親である。

時刻は午前十時半。奈江もこれから営業に出掛けるようだ。約束の時間が迫っているのか、しきりに時計を気にしている。

綾子が近寄ると、奈江は顔の前でパンツと両手を合わせ、「ごめん！ 一つ頼まれてっ！」と叫んだ。

「猪野商事のチーフバイヤーさんに見せたい商品サンプル一式が、今朝やっと揃ったのよ。午後から役員会議に出るって言うってたから、その時にコレも持っていけるように渡したいの」

現在、Mon favoriは猪野商事アレル部門とのコラボレーション企画を進めている。

昨今、日本では北欧と名のつく雑貨や家具の人気が非常に高い。また北欧でも若いデザイナー

達がどんどん世に出始めている。そこで、Mon favoriが力を入れている北欧雑貨と、猪野商事アレル部門の買い付けた北欧ファッションを組み合わせたブランドを立ち上げ、全国のセレクトショップに売り込もうとしているのだ。

この企画の責任者は、Mon favoriでは部長である奈江、猪野商事ではチーフバイヤーである猪野拓海たくみ——すなわち忍の妹が務めている。

普段から海外を飛び回っている拓海は、今夜の飛行機で日本を発つ予定だという。

それまでに処理しなければならぬ仕事如山積みで、彼女がこちらにサンプルを取りにくるのは難しいらしい。

「私も、これから出なくちゃいけないくて……悪いんだけど、アヤが届けてやってくれない？」

「分かりました」

特別急がなければならぬ仕事のない綾子は、快く引き受けた。

「ありがとうございます」

奈江はほっとしたように息を吐いた後、壁掛け時計を見て飛び上がった。

「うあつ、ヤバい、遅れそう！ 今日の相手は絶対、待たせられないのよ。ゴメンね、アヤ。よろしく！」

「あ、はい。部長もお気をつけて」

奈江は綾子の母と同じくらいの年齢で、実に元気で若々しい。

彼女は慌ただしくオフィスを飛び出そうとしたが、扉をくぐる直前で綾子を振り返って言った。

「そのサンプル、アパレル部じゃなくて社長室に届けてくれる？」

「社長室、ですか？」

「拓海はたぶん、今日はバタバタしてて捕まらないと思うの。だから、一緒に役員会議に出る予定の洋君に預けておいて。彼は相変わらず、社長椅子でふんぞり返ってると思うから」

「分かりました」

「それと……私の机の上のヤツ。あれも一緒に、あのおっさんに渡してくれる？」

「え？」

綾子が奈江のデスクを振り返ると、小さな紙袋がちよこんと置かれていた。

「……実は今日、彼の誕生日なのよね。まあ、久しぶりに祝ってやろうかなって」

奈江と、猪野商事の社長である猪野洋——つまり忍の両親は、五年前から別居をしている。きっかけは、泥酔した洋と彼の秘書のキスシーンを、奈江が目撃してしまったことだった。

奈江を深く愛しながらも、酔った上での過ちなど大したことではないと主張していた洋。

洋と、親友でもあった秘書の川村を信じられなくなり、彼らを避けることで自分を保とうとしていた奈江。

どちらも相手を想いつつ、がちがちに意地を張り合っていた。それを解して溶かしたのは、綾子の涙だった。

洋と川村は、過去の過ちを奈江に謝罪した。そして奈江は今、二人を許そうとしている。

そんな彼女からの誕生日プレゼントだ。奈江が直接渡した方が、洋は喜ぶに決まっている。

しかし、奈江はどうにも照れくさいらしい。

もしかしたら、拓海への届け物よりもこちらが本命なのではないか、とさえ綾子は思った。

「ごめんね、アヤ。お願い」

「はい、任せてください」

ほんのり頬を赤らめる奈江に、綾子にはっこり微笑んで頷いた。

猪野商事の社長室があるビルの最上階に行くには、受付のある十四階から専用のエレベーターに乗り換える必要がある。そのため、綾子はまず猪野商事の受付に立ち寄って用件を告げた。しかし——

「そのような面会のご予定はうかがっておりません」

意気揚々とやってきた綾子に、ぴしゃりと冷やかな言葉が浴びせられた。

以前にも奈江に頼まれて、綾子はこちらへ来たことがある。その時は、奈江が受付に電話をして話を通してくれていた。しかし、今日はそんな時間の余裕がなかったのだろう。

同じビルだという気安さで、つい事前に連絡もせず訪ねてきてしまった自分の浅はかさを、綾子は激しく後悔した。

猪野商事の受付には、二人の受付嬢が座っている。

その内の一人は、冷たい目で綾子を見据えて続けた。

「アポイントもなしにいらっしやっつては、最上階へはお通しできません」

「あ、すみません。ええつと……」

彼女は前回綾子が猪野商事を訪れた時に、最上階の重役フロアに案内してくれた受付嬢である。そして忍のフランス出張中、猪野ビル一階のコンビニで綾子に声を掛け、忍と秘書の山本の男女関係を匂わせて綾子を不安に陥れた人物だった。

彼女は今、おろおろする綾子を冷ややかに見つめて門前払いしようとしている。

しかし、もう一人の受付嬢が内線で社長室に連絡をしてくれた。その内線で、どうやら綾子を通すよう指示を受けたようだ。

彼女が綾子を案内するため、廊下を歩き出そうとすると……

「私のご案内します。——どうぞ」

なぜか綾子に好意的ではない方の受付嬢がそう言って、さっさと歩き始めてしまった。

綾子は、さすがに少し不穏なものを感じる。

とはいえ、エレベーターまではここからすぐの距離。綾子は黙って彼女の後についていくことにした。

(あ、あれ……?)

ところが受付嬢はエレベーターの前を通り過ぎ、非常扉の方へ向かう。

最上階へのエレベーターは、点検中か何かで使えないのだろうか。

綾子は不思議に思いつつも、受付嬢が導くまま歩を進めた。

開きっぱなしの非常扉の外は、階段になっている。

そこは、もう一人の受付嬢が控える受付からは死角で、人気がない場所だった。

「あのう……」

無言のままの相手と一緒にいるのが気まずく、綾子はもうここまで結構だと伝えようとした。最上階までは二階分の階段を上るだけなので、案内は特に必要ない。

しかし、受付嬢は階段を五段ほど上ると立ち止まり、突然くるりと後ろを振り返った。

そして、まだ階段に足をかけていなかった綾子を冷やかな目で見下ろし、口を開く。

「急にやってきて社長室に通せだなんて、随分図々しいんですね。里谷綾子さん」

「え？」

「この会社の社員が、どれだけ頑張って猪野商事に入ったのか分かってるんですか？ それに、誰でも最上階に行けるわけではないんですよ」

「あの……」

どうやら受付嬢は、綾子が気軽に重役達の部屋に通されるのが気に入らないようだ。

猪野商事の社員でも、一定の役職以上の者でないと、最上階に足を踏み入れることはない。

とはいえ、アポイントメントは取り忘れたものの、綾子は猪野商事と仕事をしている別会社の社員。受付に着いた時に、会議に必要なサンプルを届けにきた旨は告げているし、現にもう一人の受付嬢は丁寧に対応してくれた。

なのに、綾子の前に立ちただかるこの受付嬢は、はなから綾子を仕事相手だとは思っていないらしい。受付嬢は、さらにとんでもない言葉を続けた。

「専務だけではなく、今度は社長にまで取り入るつもり？　あなた、うちの会社に入り込みたいだけじゃないんですか？」

「……は？」

「オフィスを間借りしなければいけないような小さな会社より、自社ビルを持っている大会社の方が、ずっと魅力的ですものね」

一瞬、綾子は彼女の発した言葉の意味が分からなかった。

やがて、それが Mon favori を、ひいてはこのビルにテナントとして入っている全ての会社を見下す言葉だと気づく。

とたんに、ふつふつと怒りがこみ上げてきた。

綾子は奈江から預かったサンプルの詰まった箱と、彼女の心がこもった小さな紙袋をしっかりと抱え直す。そして受付嬢をまっすぐ見据えて、口を開いた。

「私は、今の会社で雇っていただけのことにとっても感謝しています。モン・ファヴォリの社員を名乗れることを誇りに思います。失礼ですが、御社にも、御社の社員であるあなたにも、劣っているとは思っていません」

綾子が言い返してくるとは思っていなかったのか、受付嬢は少し驚いた後、顔を強張らせた。

それにかまわず、綾子は続ける。

「確かに、社会人として、私はまだまだ誰にも敵わないかもしれませんが、でも、大きな会社に勤めていらつしやるというだけで、誰かを羨ましく思ったりしません！」

自分が社会人として未熟だから、仕事をする上で相手にされないことはあるかもしれない、と綾子は思う。

しかし、受付嬢が言ったような理不尽な理由で Mon favori を貶められては、さすがに黙ってられないかった。

Mon favori の人々とともに働ける毎日は、綾子にとってかけがえのないものだ。そこで得た縁や経験の素晴らしさは、猪野商事という大会社が相手であろうと、比べられるものではない。

「与えられた仕事には、責任を持ちたいと思っています。今日は、弊社の部長の指示で御社にお邪魔しました。それだけです」

綾子は必死に怒りを抑え、極力冷静な言葉を選んだ。

受付嬢に対してひどく腹を立ててはいても、Mon favori の社員として猪野商事を訪れているという自覚が、綾子の激情を戒めていた。

一方、妙な選民意識に取りつかれていた受付嬢は、綾子の毅然とした態度に一瞬怯んだ。

しかし、すぐさま逆上したように声を荒らげる。

「偉そうに言わないでちょうだい！」

十四階のフロアには、せわしく人の行き交う気配がある。

ところが、この階段を利用する社員は、普段からほとんどいないらしい。受付嬢の苛立った声は、感情の高ぶりに比例してますます大きくなったが、それに気づく者はいなかった。

見下していた相手に反論されて腹が立ったのか、受付嬢は目を吊り上げた。

物凄い形相で、綾子を睨みつけている。

「そもそも、あなたなんか専務の隣には似合わないわ！ 一緒にいたって、専務に何のメリットがあるっていうのよ！」

「——っ！」

彼女の叫び声を聞いたとたん、綾子は言葉を失った。

綾子自身、洗練された大人の男性である忍に、子供っぽい自分が釣り合っているとは思っていない。受付嬢の言葉は、綾子の胸にぐざりと突き刺さった。

明らかに怯んだ様子ひるの綾子を見て、受付嬢は「それ見たことか」とでも言うように口の端を上げた。ところが——

「いい加減にしたら？」

綾子の背後——下の階段の方から、凜とした女性の声が響いた。

突然現れた第三者に驚き、綾子と受付嬢は声のした方に顔を向ける。そこにいたのは……

「や、山本さん……？」

猪野商事専務秘書である山本麻衣子だった。

フランスからの帰国は今日の午後と聞いていたが、予定より早く到着したようだ。

「お疲れ様です、里谷さん」

山本はヒールをカツカツ鳴らして階段を上のぼってくると、まだ十四階の非常扉近くに立っていた綾子の隣に並んだ。そして左手の中指で眼鏡を押し上げ、気まずそうに自分を見下ろしている受付嬢

を見据みえて言った。

「あなた、我が社の顔としてお客様に接するのが仕事でしょう。それなのに、そのお客様を人気がない場所に連れ込んでいちゃもんをつけるなんて、何を考えているんですか？」

どうやら山本は、綾子と受付嬢のやりとりを聞いていたらしい。

専務秘書より受付嬢の方が立場が弱いのか、はたまた山本の方が社歴が長いのか。山本を前にした受付嬢に、先ほどのような威勢はなくなっていました。

「受付は、あなたにとって都合のいい人間とそうでない人間を振り分ける場所じゃない。何を勘違いしているんです？」

受付嬢の顔は、みるみる青くなっていく。

山本はそれにかまうことなく、隣で立ち尽くしている綾子に顔を向けて「どちらへ？」と尋ねた。

綾子は慌あわててサンプルが入った箱を掲げ、「社長室へ」と答える。

すると山本は頷うなずき、再び受付嬢へと向き直った。

「つまり、里谷さんは社長のお客様。社長のお客様に暴言を吐くということは、社長に喧嘩けんかを売っているのと同じです。そんなことすら人に言われないと分からないなんて、社会人失格ですね」

今度は受付嬢が言葉を失う。さらに彼女の目には、涙が浮かんだ。

その様子を目の当たりにした綾子は、「も、もうそのくらいで……」とおろおろしながら山本を宥なだめにかかる。山本はそんな綾子を見てため息をつくど、すっかり俯うつむいてしまった受付嬢をなおも徹てつしい目で見据みえた。

「お客様は、私が責任を持って社長室へご案内します。あなたには任せられませんから」
有無を言わさぬ声が、非常階段に響く。

返事すらできない受付嬢を押し分け、山本は綾子を促して階段を上り始めた。

「や、山本さん、あの……」

「……あなたは、まったく。どうして人気がない場所に連れ込まれているんですか？ エレベーターを使わないなんて、何かおかしいと思いませんか？」

階段を上りながら、山本は呆れたような顔を綾子に向ける。それでも、眼鏡の奥の瞳には受付嬢に向けていた鋭さはなく、綾子はほっと肩の力を抜いた。

「お、思いましたけど、何か事情があるのかなって……。それに、二階分くらいなら階段で上っても大したことないかと」

そこまで言って、綾子はふと気になったことを山本に尋ねた。

「そういえば、山本さんはどうしてあそこに？」

「私、エレベーターの閉塞感が大嫌いなんです。だから、できる限り階段を使っています」

綾子は目を丸くし、感心したように答えた。

「健康的でいいですね」

山本は、かなりの閉所恐怖症だった。はからずも知ってしまった彼女の弱点だが、綾子はやや的外れな返答をして、それを見事にスルーした。

二人は、そのまま並んで階段を上りきる。そして最上階のフロアへ足を踏み出そうとした時、山

本は綾子の肩にそっと手をかけて口を開いた。

「さっき……彼女が言ったことですけど」

「え？」

「あなたに専務の隣は似合わないとか、あなたと付き合って何のメリットがあるのか、とか」

「あ……」

蒸し返された話題に、トゲが突き刺さったままだった胸の奥が疼いた。

しかし山本が続けた言葉は、その痛みを拭い去るものだった。

「もしまた誰かにあんなことを言われても、堂々と胸を張っていらしてください」

「え？」

きよんとする綾子をじっと見つめ、山本は続ける。

「専務はもともと有能な方でしたけれど、あなたと出会ってから、以前よりもいっそう精神的に仕事に取り組まれるようになりました。さっきの彼女の言葉を借りるなら、それこそ、あなたが専務と我が社にもたらしたメリットでしょう」

「そ、そんな……」

「あなたのおかげで、専務の仕事の効率は随分と上がりました。さっさと仕事を終わらせて、あなたと一緒に過ごしたいからでしょうね」

山本はくすりと笑ってそう言った。

「山本さん……」

初めて顔を合わせた時、山本の対応はひどく事務的で、綾子に好意的ではないように感じられた。しかし彼女はただ感情が表に出ないだけで、実際は面倒見がよく優しい女性だった。

「もっと、自信をお持ちください。専務は他の誰でもない、あなたに動かされているんです」綾子を安心させるように、そして励ますように、山本は目を細めて言った。その理知的な瞳から伝わってくる優しさに、綾子はふと気づく。

(山本さんって、お姉ちゃんみたい……)
姉の薫子が綾子に向ける、温かな眼差し。

それとよく似たものを山本の視線から感じ取り、綾子はほっと心が解けていくように思えた。

同時に、これから姉を紹介しようという時に、こんなに自信を持って、不安定ではないと感じた。忍は綾子を誰よりも想ってくれているのだから、彼に釣り合うかどうかなんて悩む必要はないだろう。

綾子は、自分より背の高い山本を見上げて微笑んだ。

「山本さん、ありがとうございます。それから、おかえりなさい」

「はい、ただいま戻りました。——あ、そうだわ里谷さん。これ、お土産」

「え？ 私にですか？」

「あなたへのお土産をゆっくり選ぶ時間がなかったからって、専務に頼まれていたんです」

「わあ、わざわざすみません！」

綾子が山本から受け取った紙袋の口からは、先の尖った何かが突き出ている。

ラッピングされてはいるが、店のロゴが印字されただけの半透明のシートに包まれていたので、その土産が何かはすぐに分かった。

「山本さん……あの……」

「……お土産を選ぶのって、とても難しいんですね」

綾子はこの時初めて、山本の困ったような顔を見た。

その後、綾子は猪野商事の社長室を訪ねて、洋とその秘書・川村の歓迎を受けた。

洋はせっかくだからお茶でもどうかと誘ってくれたが、綾子はそれを丁寧に断り退室した。

社長室に案内してもらった時、山本からも専務室に立ち寄っていかないと誘われたが断った。

奈江に頼まれたサンプルは、確かに洋に届けた。

それに、奈江が用意した誕生日プレゼントを受け取り、洋の顔が嬉しそうに綻んだのも見届けた。

綾子の果たすべき役目は済んだのだ。

これ以上、仕事と関係のないことで猪野商事に長居すれば、それこそ公私混同。

受付嬢相手に、偉そうに啖呵を切った意味がなくなってしまう。

綾子は社長室を出ると、すぐさまエレベーターに飛び乗って十四階に下りた。

先ほどの受付嬢と顔を合わせるのには気まづかったが、綾子はペコリと頭を下げて目が合わないようにしつつ、足早に受付の前を通り過ぎた。

だからその時、受付嬢の方も青い顔をして目を逸らしていたことに、綾子は気がつかなかった。

その日の終業後。

昨夜の宣言通り定時で仕事を終えた忍と、綾子はビルの地下駐車場で待ち合わせた。

昼前に彼から一通メールが届いたが、受付嬢とのことについては触れられていなかった。

だから綾子は、山本は忍に何も話さなかったのだと思い、少しほっとしていた。

受付嬢の理不尽な態度や言葉は、後から思い出しでもやはり腹立たしい。

しかし、綾子は自分の言葉でちゃんと反論できた。忍とのことについては言葉に詰まったが、山本のフォローのおかげで心も軽くなった。

昼間の出来事は、綾子の中ではすでに完結していた。

ところが、忍にとっては違ったようだ。一足先に車内で待っていた彼は、綾子の顔を見るなりドアを開けて、助手席に引つ張り込んだ。

運転席から身を乗り出した忍に、苦しいくらい力強く抱き締められる。

綾子は忍の腕の中で、両目をばちくりさせた。

「山本さんに聞いたよ。今日はうちの受付に、嫌な思いをさせられたんだってね」

「あ、いえ……」

「猪野商事の人間として、俺も君に謝らなければならない」

忍はそう言うと、件の受付嬢の処遇について語った。

彼女は実はこれまでも、いくつか問題を起こしていたらしい。個人的な理由で客人を「鼻屑」したり、立場の弱い相手には不躰な態度を取ったりと、叩けば次々と埃が出てきた。

猪野商事の名を笠に着て、終業後も随分派手に立ち回っていたとのこと。

彼女は、ひとまず受付から外されることになった。

ただし、他の部署に配属したところで、どの社員も彼女が受付嬢であったことを知っている。問題を起こして異動させられた、と噂にならないわけがない。

最終的に彼女は会社を辞めることになるだろう、と忍は言った。

何だか自分のせいで彼女が失職するみたいで、綾子は少々後味が悪かった。

「私、別にもう気にしてないんですけど……」

「でも、彼女の行為は社会人として許されることじゃない。それは分かるだろう？」

「は、はい……」

「何より——俺が許せない」

忍は吐き捨てるようにそう言うと、鋭い目で宙を睨んだ。綾子は、戸惑った表情を浮かべて首を竦める。すると忍は優しい眼差しを綾子に向けて、彼女の頬を撫でた。

「山本さんがね、綾子の対応を随分と褒めていたよ。モン・ファヴォリを貶めようとした受付嬢に対し、怯まず冷静に反論する姿はとても頼もしかったって」

「や、山本さんがっ？」

「あの人、自分にも他人にも厳しいから、誰かを褒めることなんて滅多にないんだよ」

「そ、そうなんですか？ でも山本さん、忍ちゃんのこと褒めてましたよ。有能な方だって」

「へえ……それは光栄だね」

忍はそう言つて笑うと、綾子の身体を再びキュッと抱き締めた。

「自分の働く会社に誇りを持てるって、素晴らしいことだと思ふよ。俺はモン・ファヴォリの社長の孫として、素直に嬉しい」

忍に褒められ、綾子は照れ笑いを浮かべる。自分の行動を正しかったと言ってもらえて、とにかく嬉しかった。

忍は綾子の柔らかな頬に手を添え、蕩けるような笑みを浮かべて言った。

「綾子が、モン・ファヴォリの社員でよかった。綾子と出会えてよかった」

「忍ちゃん」

「この想い、ちゃんと綾子のお姉さん達にも伝えたいと思ふよ」

忍の心からの言葉に、綾子はこくりと頷いた。

3

食材を買うためスーパーに立ち寄った後、午後七時半には忍のマンションに到着した。

綾子は、夕食の用意をする忍を手伝った。

あまり役に立っていない自覚はあったが、何かしていないと落ち着かない。

いよいよ今夜、電話越しとはいえ姉に忍を紹介するのだ。

忍は平静な様子だが、綾子は緊張を隠せなかった。

夕食を取り入浴も済ませると、二人は姉に電話するまでの間、リビングで過ごすことにした。

綾子はソファに腰を下ろすと、あるものの存在を思い出して自分のバッグをあさった。

そうして、出てきたのは……

「忍ちゃん、これ……」

「うわっ、何？ その見覚えのある物体……」

珈琲を淹れていた忍は、あからさまに顔を顰める。

綾子がバッグから取り出して見せたのは、クリスタルでできたエッフェル塔の置物だった。

昼間、山本から渡されたフランス土産である。

数週間前に海外出張から戻った奈江も、同じような物を忍に買って来た。

「もっとうこう、綾子に似合うアクセサリーとか香水とか……期待してたんだけど……」

しかしそのクリスタルの置物こそ、自分が山本に委任した綾子への土産だと聞き、忍は深々とため息をついた。

一方、綾子の方は満更でもなかった。

リビングのガラステーブルの上に置くと、エッフェル塔の置物はなかなかこの部屋にマッチして

いるように見えたからだ。綾子のこぢんまりとした家よりも、忍の家の広いリビングの方が高級感があり、クリスタルの輝きも引き立つ。

「忍ちゃん、せっかくだから、この部屋に飾らせてもらっていいですか？」

綾子が尋ねると、忍は「うん？」と片眉を上げた。そして、すぐに顔を綻はせる。

「いいよ。綾子のものならどんどん置いて。何なら綾子の部屋の中身全部、うちに移動させてもいい。」

「え？」

「まあそれは、おいおい実行に移していくとして……」

きよんとする綾子に意味深な言葉をかけると、忍は珈琲のカップを二つガラステーブルの上に置いた。そして壁掛け時計を見上げ、「そろそろか」と呟く。

忍は壁際の小さなデスクの上からノートパソコンを持ってきて、綾子の隣に腰を下ろした。ガラステーブルにノートパソコンを置き、電源を入れる。

綾子は、彼が持ち帰った仕事をする気なのだと思った。だから、邪魔をしないようにと少し身体を離そうとしたのだが、さっと肩を抱かれて反対に引き寄せられてしまう。

「忍ちゃん、あの……？」

「綾子がパソコンの前においてくれなきや意味がないんだ」

忍はそう言って珈琲を一口飲むと、何やらノートパソコンを操作した。

綾子も会社でパソコンを使うが、データ入力や仕事のメールのやりとり、インターネットでの検

索以外、馴染みがない。

目の前のディスプレイには、何かのウィンドウが表示されていた。

忍がIDらしきものを打ち込んでしばらくすると、そのウィンドウに人の姿が映し出される。

カップを片手に寄り添う、おじいさんとおばあさんだ。

彫りの深い顔立ちと鮮やかな瞳の色は、どう見ても外国人。

写真かと思つて綾子が首を傾げると、彼らはにこりと微笑んで口を開いた。

「Bonjour」

ボンジュールは、綾子も知っている。フランス語の「こんにちは」だ。

綾子は慌てて忍を見上げた。

「Bonjour」

忍はパソコンに向かって挨拶を返すと、戸惑う綾子に微笑んで告げた。

「マダム・ドルトールとムッシュ・ドルトールだよ」

「えっ……!？」

「綾子に会わせるって、約束してたもんでね」

ウィンドウに映る二人の老人は、忍が先日フランスで契約を取りつけた、カルトナージュ職人のマダム・ドルトールとその夫であった。

カメラのついているパソコンがあれば、インターネット回線を利用して、世界中どこにいてもビデオ通話ができる。

綾子と忍がいる日本は、午後十時を回ったところ。

一方フランスは、サマータイムなので午後三時過ぎ。

パソコンのディスプレイ上で、老夫婦は午後のお茶を楽しんでいた。

「ぼ、ぼんじゅーる」

忍はTシャツにズボンという部屋着姿だが、綾子はパジャマ姿なので少し恥ずかしい。おずおずと拙い挨拶をする彼女に、画面の中のマダム・ドルトーは笑顔で何か言った。

「Elle est très mignonne」

英語の成績もそれほど振るわなかった綾子は、もちろんフランス語なんて分からない。分からないなりに、へらりと愛想笑いを返していると、隣から忍が通訳してくれた。

「綾子のこと、めちやくちや可愛いつて」

「め、めるし、ぼく」

綾子は慌てて礼を言った。

彼女の知っている他のフランス語は、こんばんはを意味する「ぼんそわー」くらいである。

「忍ちゃん、フランス語を話せるんですね。すごい」

「山本さんほど流暢じゃあないけどね」

綾子の素直な賞賛に苦笑すると、忍は彼女の肩をもう一度抱き直してディスプレイに向かう。

「Elle est ma fiancée」

忍は綾子を「僕の婚約者です」とドルトー夫妻に紹介した。

日本でも使われるフィアンセという単語は、もともとフランス語。

綾子も、それが婚約者を意味することくらい知っている。ところが日本語とは違うアクセントのせいで、綾子はその単語がフィアンセだと気がつかなかった。

言葉が分からない綾子は、自分に話が振られると、忍に通訳してもらった。

難攻不落の職人と聞いていたので、どんな気難しいおばあさんかと思っていたが、マダム・ドルトーは終始笑顔を決やさない穏やかな人だった。

おかげでしばらく接しているうちに、綾子も自然な笑顔を返せるようになっていた。

遠く海を隔てたビデオ通話は、その日は一時間ほどで終了。

通話を終える直前、忍は綾子には分からない言葉をすらすらと発した。

それに対し、ドルトー夫妻は瞳を輝かせ、口を揃えて言った。

「Bonne chance」

綾子の耳に「ボンヌチャンス」と聞こえたそのフランス語は、「頑張つて」や「幸運を祈る」を意味する。忍にそう説明してもらった綾子は、ドルトー夫妻が何故そう言ったのだろうかと首を傾げた。

そんな彼女を見て、忍はすっかり冷めた珈琲を飲み干し、ひとつ息を吐いてから言った。

「俺だってね、それなりに緊張してるんだよ」

「え？」

「綾子のお姉さんとのファーストコンタクト。マダム・ドルトーとの会話で、いいウォーミング

アップをさせてもらったよ」

「あ……」

「ついでに、励まされてしまったね」

忍は先ほど、フランス語で「これから綾子の家族と大切な話をする」と言ったらしい。そこでドルトー夫妻は、「頑張つて！」と忍を応援したのだ。

「じゃあ、そろそろ電話しようか。——お姉さんに」

そう告げた忍の視線の先で、時計の針はちょうど午後十一時を指していた。

綾子は、忍の自宅の固定電話から実家に電話を掛けた。

ところが、誰も電話に出ない。

もうしばらくしてから掛け直そうと思った時、ようやく電話が繋がった。

受話器を取ったのは、今年米寿を迎える祖父である。

「——えっ……火事!？」

のんびりとした口調で祖父が発した物騒な言葉に、綾子は眉を顰めた。

今から二時間ほど前、近所の民家で火の手が上がり、大騒ぎになっていたのだそうだ。

姉の薫子と次兄の虎太郎は、地域の消防団員として現場に向かったらしい。

火事があったという家には、腰の曲がった老夫婦が二人で暮らしている。幼い頃、彼らに随分と可愛がってもらった綾子は、その身を案じた。

幸い隣の住人が焦げ臭いとすぐに気づき、素早く老夫婦を避難させたおかげで、二人とも火傷一つ負わずに済んだという。

加えて、消防団員にも消防職員にも被害が出なかったと聞き、綾子は心底ほっとした。

ただし、薫子はまだしばらく家に帰ってこれないだろう。

彼女は現在、消防団長を務めているのだ。事後処理にはまだ時間がかかるはず。

せっかく忍に時間を作ってもらったところ申し訳ないが、薫子と彼の電話越しの挨拶は日を改めなければならぬだろう。仕方なく、綾子はそのまま電話を切ろうとしたのだが……

「あ、ちよっと待ってねえ、アヤちゃん」

相変わらずのんびりとした口調で彼女を引き止めた祖父は、誰かに電話を代わった。

「——綾子か？」

「あ……ケイタロー兄ちゃん!？」

祖父から受話器を受け取ったのは、綾子の上の兄——里谷鯨太郎だった。

綾子は鯨太郎に頼まれて、忍に電話を代わった。

そしてソファの隣に座っている彼を、そっと見つめる。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。

鯨太郎は、忍と同じ三十二歳。里谷自動車整備工場を営業部長として支えている。